

古典的類型論と比較統語論*

－日本語動詞形態の分析を通して－

酒井 弘

はじめに：古典的類型論と比較統語論

18世紀後半以来200年に及ぶ言語の科学的研究のなかで、自然言語の多様性と同時に、可能な文法の範囲が厳しく制限されているという事実や種々の類型論の普遍性の存在をどのように説明するかという問題は、常に多くの研究者達の注目を集めてきた。19世紀初頭、F. von Schlegel (1808)は、諸言語にはその意味を「2次的にマークする」方法として、「語幹の内的変化」すなわち屈折による場合と、「独立の語の追加」すなわち膠着による場合が観察されることを指摘し、この二つの単純なケースが世界のすべての言語を分類する代表的な基準となり得ると主張した。このような古典的類型論の主張は、言語の多様性と類型を捉える優れた洞察として評価される一方で、早くからその限界を指摘されてきた。一例としてAnderson (1985)は、ほとんどすべての言語が両者の性格を併せ持つところから、膠着性と屈折性は個別言語の文法全体を一括して分類する基準とは考えにくいこと、形態論におけるこれらの特徴と言語の他の特徴との間にいかなる相関関係も明らかにされていないこと、これらの2点を古典的類型論の限界として指摘している。

一方、現代の言語学理論を代表する生成文法理論においては、言語間の相違は、「生得的言語習得器官」であるところの普遍文法(Universal Grammar)に備え付けられたパラメーター(媒介変数)の値を変更することによって生じると主張されている。Chomsky (1988)においては、普遍文法とパラメーターの関係はいくつものスイッチがついた箱を備えたネットワーク・システムに例えられ、子供は与えられた言語データに応じてパラメーターの値、すなわちスイッチの切り替え方を一つ一つ決定することで、個別言語の文法を習得して行くとの見解が示されている。このような仮説に基づく言語の多様性に対するアプローチは、比較統語論(又はパラメーター統語論)と呼ばれ、多くの研究者の注目を集めている¹。

このような比較統語論の研究において、先駆者である古典的類型論の洞察はどの

ような意味を持つのであろうか。また逆に、古典的類型論が直面した問題に対して、比較統語論はどのように答えられるのだろうか。この論文においては、Chomsky (1995)において提案されたformal features (再帰的統語操作の対象となる素性：以下FFと略記)の理論を採用しつつ、FFが付与される要素についてのパラメータを独自に提案することで、古典的類型論の洞察を比較統語論の中に取り入れることを試みる。提案されたパラメータを組み込んだ理論は、(1) 膠着性と屈折性を言語全体の性格としてよりむしろ、それぞれのFFの実現され方に関するパラメータとして捉え、個別言語文法の性格をその組み合わせによって説明しようとする事、(2) 形態論における屈折性／膠着性と統語的移動の有無の間に重要な相関関係の存在を予測すること、以上の2点からAndersonの指摘した限界を乗り越えるものであると主張する²。続いて、日本語動詞形態の分析とその英語・フランス語との比較を通して、理論の予測する屈折性／膠着性と統語的移動の有無の間の相関関係が、予測通り正しく実現されることを明らかにする。最後に残された問題点を指摘するとともに、比較統語論研究に古典的類型論の洞察を取り入れる意義について若干の考察を試みる。

1. 議論の枠組み：ミニマリスト理論とFF

この論文では、Chomsky (1995)で提案されたいわゆる「ミニマリスト理論」を議論の枠組みとするため、先ずその概要を紹介したい。ミニマリスト理論においては、文の意味解釈に必要な意味表示(Logical Form: λ)と音声解釈に必要な音声表示(Phonetic Form: π)のみが統語表示のレベルとして認められ、従来いわゆる拡大標準理論において仮定されてきた深層構造、表層構造等のレベルはもはや想定されていない。Lexiconから選択された語彙項目のリストであるNumeration (以下Nと略記)に基づいて、句構造を構築する融合(Merge)と呼ばれる統語操作と、すでに句構造内部に導入済みの要素の位置を変更する移動(Move)と呼ばれる統語操作が、連続的に適用されることによって統語表示が派生されて行く。その間音声表示を形成する為に十分な情報が整った段階で、SPELL OUTと呼ばれる操作が適用され、音声的・音韻的情報と意味的・統語的情報が二分される。その後も必要があれば統語操作が順次適用され、文の意味表示と音声表示が派生される。NからSPELL OUTまでを顕在部門(overt component)、SPELL OUT以降 λ に至る派生を非顕在部門(covert component)、両者を併せて統語部門(syntactic component)と呼ぶ。一方、SPELL OUT以降 π に至る派生は、音韻部門(phonological component)と呼ばれている。派生のアウトプットである意味表示と音声表示は、それぞれ意味解釈及び音声化にとって不必要な要素を含んでいては

ならないという、完全解釈の原理(Principle of Full Interpretation)を満足させていなければならない。さらに加えて、このような統語的派生には、経済性の原理(Economy Principles)から導かれるいくつかの普遍的制約が課せられている³。

Chomsky (1995)においてはさらに、統語的派生を促す原動力として、FFとその照合(checking)に関する理論が提案されている。生成文法理論の伝統的見解に習って、語彙項目は素性の束であると見なされるが、FFとはその中でも特に、再帰的な統語操作の対象となる素性のことを指す。一例を挙げるならば、他動詞はその固有の特性として素性[assign accusative]を持ち、対格の名詞は随意的な素性[accusative]を持つと考えられている。Chomskyによれば、FFの中には解釈可能な素性と解釈不可能な素性が存在するが、完全解釈の原理を満足させるためには、解釈不可能な素性は派生の過程において取り除かれていなければならない。解釈不可能な素性を取り除く働きをするのが、照合という統語操作である。照合は原則として機能範疇の投射内部で行われ、照合済のFFは、解釈不可能な素性であれば統語構造から除去される。例えば先の素性[assign accusative]は解釈不可能な素性なので、素性[accusative]を有する対格名詞との間で照合が行われなければ、派生は収束(converge)しない。ミニマリスト理論においてはこのように、要素間の依存関係はFFと照合のメカニズムによって捉えられる。先に言及した経済性原理に基づいて、統語的移動は派生を収束させるためのLast Resortとしてのみ認可されるため、FFの存在は統語部門における移動を促す原動力であるとみなされる⁴。統語的移動は派生を収束させるためのLast Resortであるとの認識は、以下の議論においても重要な役割を果たすことになる。

2. FFの実現とパラメーター

このようにFFはミニマリスト理論の中で中心的な役割を果たすが、類型論的観点から考察するならば、その現われ方は言語間において一様ではない。英語と日本語における助動詞とFFの関係を例にとって、この事実を明らかにしよう。先ず次の例文を参照されたい。

- (1) a. John was eating an apple.
- b. ジョンが リンゴを 食べていた。

生成文法理論に基づく英語動詞形態の研究においては、Chomsky (1957)の分析以来一貫して、定形助動詞は統語部門においてInfl (もしくは範疇T) の位置に移動するとみなされている。このような分析を採用すると、(1a)の例においては助動詞

wasがInflの位置に移動していると考えられる。

日本語の例(1b)と比較する前に、(1a)におけるFFの現われ方、及び助動詞wasの移動がどのように動機づけられているのかという問題について検討しておきたい。第一に、(1a)における助動詞wasは、随意素性[past]を付与されていると考えられる。時制という2次的意味が、過去／非過去の形態的対立によって表され、屈折的性格の顕著な英語助動詞のパラダイムを考慮するならば、[past]がNの時点で助動詞に付与されていると考えるのは自然だからである。次に(1a)は過去時制を担う定形節であり、英語定形節と非定形節が様々な点で異なる統語的特性を示すことを考慮するならば、Inflが固有素性として[finite]を保持していると仮定することにも異論はないであろう。ここで顕在的移動の対象となるのが定形助動詞のみであることを考慮するならば、随意素性[past]と固有素性[finite]の間の素性照合が、助動詞の移動を引き起こす動機であると考えられる。Chomsky (1995)の主張に従って、移動操作は除去されるべきFFが照合相手のFFを牽引(attract)することによって引き起こされるとするならば、この場合移動の決定的要因となるのは、移動のターゲットとなるInflの担うFF[finite]であり、このFFを除去するために移動が誘発されるということになる。つまり、英語における助動詞の移動は、定形節Inflに存在する固有素性[finite]が解釈不可能であるために、随意素性[past]を付与された助動詞を牽引し、照合によって除去されるために起こると考えたい。

一方、先に提示した日本語の例「ジョンはリンゴを食べていた」においては、動詞形態とFFの関係はまったく異なっている。そもそも助動詞「い(る)」に対して、随意素性[past]が付与されているとする形態論的根拠はどこにもない。膠着語である日本語において、動詞・助動詞の語幹はその形態を変化させることなく、時制(過去)という2次的意味は独立の接辞「た」として実現されるからである。そこで本論文においては、言語間における屈折的性格と膠着的性格の相違を捉えるために、「FFの実現され方」についてのパラミターとして(2)を提案したい。

(2) 素性実現(Feature Realization)のパラミター

範疇 α の随意素性 [F] は、Numerationの段階で、次の2通りの方法のいずれかで実現される;

i) α の内部に (すなわち α の屈折形として)実現される。

または

ii) α の外部に (すなわち独立の形態素／接辞として)実現される。

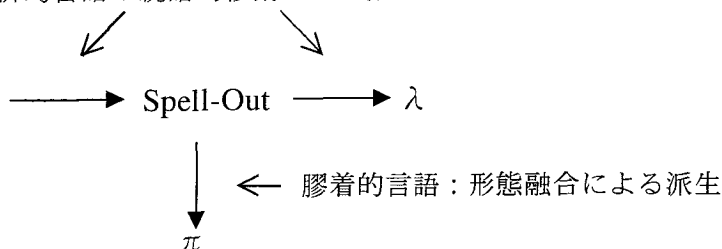
(2)において(i)のオプションが選ばれてFFが α に直接付与されれば、FFは屈折によって α 内部に実現され、照合のために牽引されることで α の移動を誘発する⁵。(ii)

のオプションが選ばれば、FFは α の外部に独立の形態素として実現される。FFの実現形である形態素は一般の語彙項目とは異なって、それ自体で音声化されるに十分な音声素性を持つとは限らないので、 α に膠着すると考えられる。この場合 α 自体には、照合を動機づけるFFが付与されていないことに注意されたい。故に接辞を α に付加するプロセスは、統語的移動ではあり得ない。Marantz (1988, 1989), Halle and Marantz (1993)は、接辞付加に代表される形態論的操作を統語部門における移動操作と区別して、音韻部門に形態融合(morphological merger)という操作を認めることを主張している。本論文においてもこれらの先行研究にらって、接辞を α に付加する操作は音韻部門における形態融合であると考えたい⁶。

随意素性であるFFが接辞、すなわち独立の形態素として実現されながら、同時に移動を誘発することはないのであろうか。先に紹介した様に、Chomsky (1995)の見解に従うならば、移動操作は除去されるべきFFが照合相手のFFを牽引することによって引き起こされる。例えば先の英語の例においては、Inflに存在する固有素性[finite]が、助動詞に付与された随意素性[past]を牽引した。一方日本語の例においては、随意素性[past]は助動詞に付与されることはなく、むしろ接辞「た」としてInflの位置に実現されている。日本語において、定形節を特徴づける素性[finite]を仮定するべきか否かは必ずしも明らかではないが、仮にInflが固有素性として[finite]を保持していたとしても、牽引するべき随意素性は助動詞に付与されていないのだから、助動詞の移動を誘発することはない⁷。固有素性[finite]は、Nの時点でInflに随意素性[past]が付与されたため、派生の開始とともに即座に照合—除去されると考えればよいだろう。

Marantz等の仮定する形態融合は、適切な音声形式を派生するために必要とされる音韻部門における操作であって、解釈不可能なFFを除去するために動機づけられた統語部門における照合／移動とは、まったく異なるプロセスである。従って、照合／移動が特徴的に関与する屈折的言語における統語表示の派生と、形態融合を中心とする膠着的言語における派生とは、全体の性格を大きく異にすると考えられる。両者の関係は、図(3)のように表すことができる。

(3) 屈折的言語：統語的移動による派生



すなわち、古典的類型論において「屈折語(inflexional language)」と呼ばれた、屈折的傾向が強い言語においては、言語表現の派生にあたって図(3)の上半を占める統語部門における操作がより重要な役割を果たし、「膠着語(agglutinative language)」と呼ばれた膠着的特徴が顕著である言語においては、図の下半を占める音韻部門における操作がより重要な役割を果たすことになる。言うまでもなく、パラミター(2)によれば、屈折的／膠着的特徴は言語全体を規定するものではなく、それぞれのFFについて決定される。しかしながら、このような形態的特徴と統語的特徴の相関によって、屈折的特徴の顕著な言語と膠着的特徴の顕著な言語における言語表現の派生は、形態的特徴以外にも大きく異なる性格を持つことになる。

具体的には、形態論における膠着性の強さと統語的移動の有無は、相補的關係にあると予想される。すなわち、(i)のオプションが選ばれて要素 α にFFが直接付与されれば、付与されたFFは α の移動を引き起こす原動力となり得るが、(ii)のオプションが選ばれて α にFFが付与されなければ、 α の移動は起こり得ない。そこで(4)のような予測を得る。

- (4) FFが固有の接辞として実現される言語においては、そのFFは移動を誘発することがない⁸。

「FFが固有の接辞として実現される」とは、それぞれのFFが特定の形式と一対一に対応することを言う。日本語のような膠着的性格の強い言語では、音韻論的变化の結果を考慮に入れば、膠着する語幹のタイプに関わらずそれぞれの接辞を特定のFFと対応させることが可能である。一方「固有の接辞として実現されない」場合とは、特定の語幹もしくは他のFFのセットと組み合わせられなければ、FFに対応する形態が確定できない場合を言う。多くの言語は両者のパターンを混在させているが、個別言語の文法を習得する子供達は、その中から支配的なパターンを特定することで、パラミターの価を決定していると考えられる。例えば英語では動詞形態の習得において、膠着的パターンが先ず習得され、補充形(suppletion)は遅れて習得される。このことは、混在するパターンの中から子供達は、(2ii)のオプションをパラミターとして選択することを物語っている。また後に検討するフランス語のような場合、一見したところ時制接辞を抽出できそうに思えるが、実は時制を表すFFは、一致を表すFF(いわゆる ϕ 素性)と組み合わせられなければ形式が特定されない。このような言語の場合、FFはあくまでも素性としての存在に留まっていると考えられる。

- (4)の意味するところをもう一度言い換えると、あるFFが関与する現象におい

て膠着的特徴を示す言語では、当該の現象において移動は起こり得ないことになる。再び日本語を例にとると、動詞形態の形成において一貫した膠着性を示す日本語においては、FFが動詞語幹に付与されているとは考えられないため、統語部門における動詞移動は存在し得ない。膠着的な動詞形態の形成はむしろ、音韻部門における形態融合の結果であると考えられる。統語的動詞移動が存在しないとすると、日本語において動詞形態の形成に関与する様々な接辞は、論理形式において、それぞれが独立した主要部として解釈されることになる。一方音声形式においては、述部に連なる形態素は形態融合の結果として、単一の語を形成することになる⁹。

日本語動詞形態に関するこのような分析は、LFにおいて接辞を独立の主要部として解釈する必要を論じたKitagawa (1986), Hoshi (1994)の分析、及び語順と階層的句構造の分析を通して日本語における動詞移動の存在を否定する Takano (1996), Fukui and Takano (1998)の主張とも一致する点がある。またYoon (1994)は、日本語とほぼ同様の膠着的動詞形態を持つ韓国語において、統語的動詞移動が存在しないことを主張している¹⁰。

一方日本語を離れば、動詞移動の存在がすでに定説として認められている言語も存在する。Emonds (1978), Pollock (1989), Chomsky (1991)等によるフランス語定動詞位置の分析、den Besten (1983), Platzack (1986)等によるゲルマン系諸語のVerb Second現象に対する分析は、動詞のInflへの移動もしくはInflを経由してCOMPへの移動を仮定している。(4)によれば、このような言語における動詞移動の存在は、屈折的な動詞形態の特徴と結び付いていることが予想される。またさらに進んで、単一の言語内においても屈折的特徴が強い部分では移動が関与し、膠着的特徴が顕著な部分では形態融合が関与するという事態も考えられる。Halle and Marantz (1993), Lasnik (1995), Bobaljik (1995) 等において提案された英語動詞形態についての分析は、まさにこのような事態の存在を示唆している。以下動詞移動をめぐるこれらの予測が実現されるかどうか、日本語動詞形態の分析を中心に明らかにしていきたい。

3. 日本語動詞形態の分析

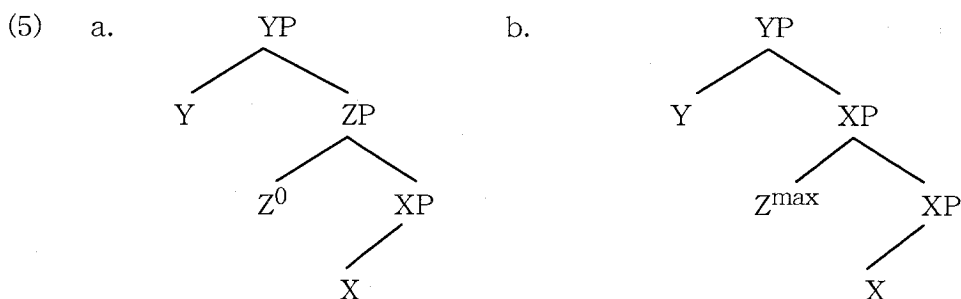
このセクションでは、日本語動詞形態の分析とその英語・フランス語との比較を通して、(4)の予測が実現されることを示す。3.1.においては主要部移動(Head-Movement)と形態融合に課せられる制約の観点から動詞・助動詞と時制辞の結合及び複合述語形成の形式的側面を検討し、3.2.においては限量詞と法助動詞のスコープ・インタラクションについての観察を通して、時制辞と法助動詞が形成する構造の論理的側面について検討する。以上の2つの議論を総合することで、日本語に

においては統語的動詞移動が存在しないとの結論に至る。

3.1. 主要部移動と形態融合

3.1.1. 主要部移動制約と隣接性条件

このセクションでは、以後の分析の前提となる主要部移動と形態融合の間の基本的性格の相違を指摘する。相違点とはすなわち、主要部移動はBaker (1988)の主要部移動制約(Head Movement Constraint)に従うが、形態融合はMarantz (1988, 1989)において指摘されている様に、主要部移動制約ではなく、むしろ隣接性条件(Adjacency Condition)に従うという点である。次の図(5a,b)を参照されたい。



主要部移動制約によれば、主要部の移動は移動経路に他の主要部が介在する場合に阻止される。つまり(5a,b)における主要部XのYへの移動は、(5a)のように移動経路に介在する主要部 Z^0 によって阻止されるが、(5b)のように非主要部 Z^{\max} が介在しても妨げられない。一方形態融合は、主要部であるか否かに関わらず、隣接性を妨げるいかなる要素によっても阻止されるため、(5b)のような構造においても適用不可能である。(6)の例を参照されたい。

- (6) a. Have you seen Adam lately?
 b. Max wird heute einen Roman lesen.
 will today a novel read
 "Max will read a novel today."

(6a)は英語における主語助動詞倒置、(6b)はドイツ語におけるいわゆるVerb

Second現象の例であるが、いずれの場合も定動詞の移動は介在する非主要部に妨げられない。一方(7)の例において、名詞句の主要部である名詞*mathematician*に属格接辞-*s*が付加できないという事実は、形態融合が介在する非主要部（前置詞句*from Göttingen*）によって阻止されることを示している。

- (7) a. [_{NP} a [_N mathematician] from Göttingen]'s proof
 b. *[[_{NP} a [_N mathematician]'s from Göttingen] proof

これらの例は、主要部移動は介在する主要部によってのみ阻止されるが、形態融合は隣接性を妨げるいかなる要素によっても阻止されることを示している。

Halle and Marantz (1993), Lasnik (1995), Bobaljik (1995) 等において提案された英語動詞形態についての分析は、このような主要部移動と形態融合の振る舞いの違いに基づいて、Emonds (1978)に始まる一連の研究において注目を集めた、英仏両語における定動詞と否定辞の位置の相違、及び英語助動詞と動詞の位置の相違を説明しようとするものである。(8)の例を参照されたい。

- (8) a. *John likes not Mary. / John does not like Mary.
 b. John is not leaving. / John has not left.
 c. Jean (n') aime pas Marie.
 love not
 'Jean doesn't love Marie.'

(8a)に見られるように、英語においては定動詞が動詞の場合否定辞*not*に先行することが許されず、dummy verbである*do*が挿入されなければならないが、(8b)に見られるように定動詞が助動詞の場合には否定辞*not*に先行する。一方(8c)におけるフランス語の場合には、動詞の場合も助動詞の場合もともに定動詞が否定辞*pas*に先行することが可能で、*do*の挿入に相当する現象は観察されない。

Lasnik (1995)は、Pollock (1989), Chomsky (1991, 1993)等の先行研究を詳細に検討した上で、次のような分析を提案している。第一に、英語助動詞及びフランス語動詞／助動詞の屈折形はレキシコンにおいて語彙的に形成されるが、英語動詞の屈折形はレキシコンにおいては形成されないと仮定する¹¹。続いて、節 (IP) 主要部であるInflの実現に関して(9a)及び(9b)を提案する。

- (9) a. Infl is freely an affix or a set of features.
 (If Infl is a set of features, inflectional features can be lexically represented with an AUX/V.)
 b. Affixal Infl must merge with a V, a PF process (distinct from head movement) demanding adjacency.

(9a)ではInflは接辞として主要部の位置に生成されるか、素性として動詞もしくは助動詞に語彙的に実現されるかがオプションとして選択されると規定している。素性として実現された場合、Inflは動詞もしくは助動詞の移動／照合を誘発する。一方(9b)では、接辞として生成されたInflは義務的に動詞と融合されなければならないが、この動詞と接辞の融合は隣接性を要求する音韻部門におけるプロセスであり、統語部門における移動とは異なると述べられている。

以上の仮定に基づいて、Lasnikは(8)のパラダイムを下記(10)のように説明している。

- (10) a. ... Infl[+F] not AUX/V[+F] ... ---> OK V raising
 b. ... Infl[+F] V ... ---> OK PF merger
 c. ... *Infl[af] not V ... ---> * PF merger blocked by not
 ---> Do support

(10a)は、英語助動詞及びフランス語動詞／助動詞のようにInflが素性として実現され、移動／照合が誘発された場合をあらわしている。Inflの内部の素性は移動／照合を誘発するため、動詞／助動詞は否定辞*not/pas*を越えて移動し、否定辞に先行する位置に現われる。(10b)は英語本動詞の場合のように、接辞として生成されたInflと動詞の融合が要求される場合をあらわしている。この場合、両者が隣接していれば形態融合が成立する。しかし(10c)のように、介在する否定辞によって両者の隣接性が妨げられる場合には、dummy verbである*do*が挿入されることになる¹²。

本論文において主張された素性実現に関するパラミターによれば、Lasnik等による上記の分析と同様に現象を分析することができる。まず英語における動詞形態の形成は、助動詞においては屈折的、動詞においては膠着的である。故に前者においてはオプション(2i)が、後者においてはオプション(2ii)が選ばれていると考えられる。オプション(2i)が選択された場合、すなわち語幹にFFが付与された場合には、FFが助動詞の移動を誘発するため、助動詞は否定辞に先行する位置に現われる。一方オプション(2ii)が選ばれてFFが接辞として実現された場合には、FFは動詞移

動を誘発することはなく、形態融合によって語幹と結びつくと考えることができる。この時否定辞によって隣接性が妨げられれば、dummy verbの挿入がおこる。最後にフランス語の場合には、先に議論したように、動詞助動詞の区別なく、時制を示すFFが単独で接辞としてあらわれることはない。故にいずれの場合においても選択されているのはオプション(2i)であって、移動が誘発されることになる。

(2)のパラメーターは、このようにLasnik等とほぼ同様の分析を可能にする一方で、(4)のような形態的特徴と統語的移動の有無の相関を予測する類型論的仮説である点で、彼等の提案とは異なっている。特にLasnikの提案においては、Inflが接辞として実現されるか否かと動詞／助動詞の屈折形がレキシコンにおいて形成されるか否かは独立のオプションであると考えられているので、必ずしも(4)のような予測につながらない。Lasnikの分析においては、実際にはありえない組み合わせ、例えばInflが接辞として実現され、かつ動詞／助動詞の屈折形がレキシコンにおいて形成されるような場合も論理的に可能である。このような過剰生成を排除するために、Lasnikは接辞であるInflは照合のための素性を欠くと仮定しているが、この仮定はより深い原理から導き出されるものではない。

一方本論文で主張されているように、膠着性と屈折性を(2)のパラメーターから導き出す理論によれば、接辞と屈折形との相違は同一のFFが素性のみで独立して顕在化するか、語幹に加えられてその一部として顕在化するかの相違であり、両者の関係は相補的でなければならない。故にありえない組み合わせを予想することはなく、接辞として顕在化したInflが移動を誘発することもあり得ない。言うまでもなく、接辞として顕在化したInflが移動／照合を誘発するような言語が存在するか否か、すなわち予測(4)がより広範な言語事実に照らして果たして妥当であるか否かは、今後の研究によって明らかにされるべき課題である。しかし、反証となる言語事実が指摘されない限りにおいて、言語の多様性に課せられた普遍的制約の予測につながる(2)は、より興味深い提案であると言えるだろう。

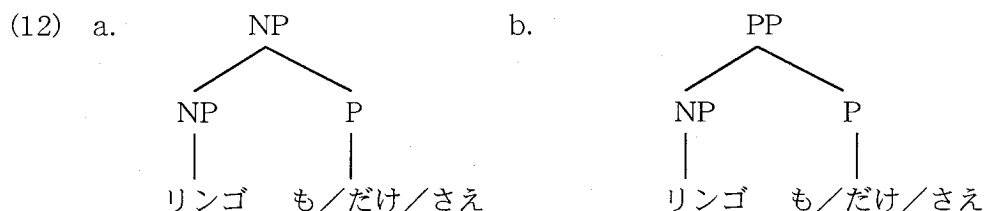
3.1.2. Kuroda (1965) の小辞と句構造

このセクションにおいては、次節以降の議論において重要な役割を果たす、「も／だけ／さえ」などの、Kuroda (1965)の分析を通して広く知られる所となった小辞が形成する句構造について考察する¹³。(11)はそれぞれ、名詞句、動詞句、文がこれらの小辞を伴って現われる例である。

- (11) a. タカシが リンゴも／だけ／さえ 食べた。
b. タカシが リンゴを 食べも／だけ／さえ した。

c. タカシが リンゴを 食べたとも／だけ／さえ 言われた。

本論文においては、これらの小辞はそれを伴って現われる名詞句、動詞句、文などを補部にとる構造ではなくて、それらに付加された構造を形成すると主張したい。すなわち、以下の議論が正しければ、(11a)における「りんごも／だけ／さえ」の部分の構造は、(12a)であり、(12b)ではあり得ない。



(12a)タイプの構造を仮定する最大の根拠は、これらの小辞が上位の述語による補部の選択に関与しないという点である¹⁴。助動詞による補部の選択と、それに伴うdummy verbの挿入を例にとってこの点を明らかにしよう。日本語における「た／まい／ません」などの助動詞は、補部に動詞的述語を要求するが、形容詞的述語はこの制限を満たせないため、dummy verbである「ある」が挿入されなければならない。動詞的述語と形容詞的述語の間のこのような相違は、以下の例文(13)及び(14)において明らかである。

- (13) a. タカシは リンゴを 食べた。
 b. タカシは リンゴを 食べまい。
 c. タカシは リンゴを 食べません。

- (14) a. リンゴは *おいしくた／おいしかった (おいしくあった)。
 b. リンゴは *おいしくまい／おいしくあるまい。
 c. リンゴは *おいしくません／おいしくありません。

(13)において助動詞「た／まい／ません」は動詞語幹「食べ」に直接後続することができるが、形容詞語幹に後続する(14)においては、「ある」が挿入されなければ非文法的となる。この「ある」の挿入規則は、概略(15)のように定式化できる¹⁵。

- (15) $\phi \rightarrow \text{aru} / \text{AP} \text{ ___ } -\text{ta}/-\text{mai}/-\text{maseN}$

ここで注目すべきは、問題の小辞が形容詞的述語とともに現われる(16)のような例である。

- (16) a. リンゴは おいしくも／だけ／さえ あった。
b. リンゴは おいしくも／だけ／さえ あるまい。
c. リンゴは おいしくも／だけ／さえ ありません。

(16)の例文は、形容詞的述語と助動詞の間に「も／だけ／さえ」などの小辞が介在する場合も、「ある」の挿入を求める要求に変化がないことを示している。さらに(17)の例を参照されたい。

- (17) a. タカシは リンゴを 食べも／だけ／さえ した。
b. タカシは リンゴを 食べも／だけ／さえ するまい。
c. タカシは リンゴを 食べも／だけ／さえ しません。

動詞的述語を伴う(17)の例文においては、異なった形式のdummy verb「する」が挿入されている。もし(16)における「ある」の挿入が、「も／だけ／さえ」の存在によって要求されているならば、(17)においても「ある」が挿入されるはずである。しかし実際は(17)において「ある」は要求されないので、(16)におけるdummy verb「ある」の挿入は、「も／だけ／さえ」の存在には係わりなく、形容詞的述語の存在によって要求されていると結論できる。

助動詞による述語タイプの選択は、一般に局所的である。形容詞的述語の存在が、介在する範疇の投射を飛び越えて「ある」の挿入を要求するとは考えにくい。一方小辞が独自の投射を形成せずに、形容詞的述語が形成する句に付加されていると考えれば、(14)に適用された「ある」挿入の規則(15)を、そのまま(16)に適用できる。よって「も／だけ／さえ」などの小辞は、それを伴って現われる名詞句、動詞句、文などを補部にとる構造(12b)ではなく、付加された構造(12a)を形成していると結論できる。

3.1.3. Kuroda の小辞と形態融合

このセクションにおいては、前節においてその統語的性質を検討した小辞「も／だけ／さえ」が、日本語の複合動詞形成や動詞・助動詞と時制辞の結合を阻止することを示す。先に検討した例(17)においては、小辞「も／だけ／さえ」の後に、dummy verb「する」が挿入されていた。このような「する」の挿入は、述語が

小辞を伴う場合一般に観察することができる。

- (18) a. タカシは 走りも／だけ／さえ した。
b. 先生は タカシを 走りも／だけ／さえ させた。
c. タカシは 走りも／だけ／さえ しだした。

(18a)は動詞と時制辞の結合、(18b)は動詞と使役助動詞の結合、(18c)は動詞とアスペクト助動詞の結合におけるdummy verb「する」の挿入を表している。それではなぜ、これらの小辞はdummy verbの挿入を誘発するのだろうか。前節で議論した通り、英語における*do*の挿入は、動詞とInflの形態融合が否定辞*not*によって阻止された時に起こる。そこで(18)におけるdummy verbの挿入も、「も／だけ／さえ」などの小辞の存在が、複合動詞形成や動詞・助動詞と時制辞の結合を阻止するために引き起こされたと考えられることができる。

先に結論した通りこれらの小辞は付加詞であるため、もし複合動詞形成や動詞・助動詞と時制辞の結合が主要部移動によって形成されているなら、動詞はこれらの小辞を飛び越えて移動することが可能であり、非文法的な構造(19)が誤って派生されてしまう¹⁶。

- (19) *タカシが [VP [VP t_V] も／だけ／さえ] [v 走っ] た

一方、日本語動詞形態の形成に関与しているのが主要部移動ではなくて形態融合であるならば、小辞の存在は隣接性の妨げとなり、dummy verbの挿入はそのために誘発されたと考えることができる。英語におけるdummy verbの挿入が、隣接性を妨げる否定辞*not*の存在によって誘発されるのと同じ理由である。

以上の議論をまとめると、「も／だけ／さえ」などの小辞は付加詞でありながら複合動詞形成や動詞・助動詞と時制辞の結合を阻止するため、日本語動詞形態の形成に関与しているのは主要部移動ではなくて、形態融合であると結論できる。また(20)に示されるように、日本語では動詞だけではなく助動詞も、小辞を飛び越えて移動することはない。

- (20) a. 先生は タカシを 走らせだしそうだった。
b. 先生は タカシを 走らせも／だけ／さえ しだしそうだった。
c. 先生は タカシを 走らせだしも／だけ／さえ しそうだった。
d. 先生は タカシを 走らせだしそうでも／だけ／さえ あった。

そこでLasnik(1995)等による英語・フランス語動詞形態の分析と総合して、動詞移動の有無と形態的特徴の相関について、次のような形で言語間の相違を特徴づけることが可能である。

(21)

	動詞	助動詞
日本語	(2ii)	(2ii)
英語	(2ii)	(2i)
フランス語	(2i)	(2i)

フランス語動詞・助動詞および英語助動詞においてはオプション(2i)が選ばれているため、屈折的な動詞形態を示すとともに、統語部門における動詞移動が存在する。一方英語動詞および日本語動詞・助動詞においてはオプション(2ii)が選ばれているため、動詞形態は膠着的特徴を示し、統語的動詞移動は存在しない。これらの形態的特徴と統語的動詞移動の有無の間の相関関係は、まさにパラミター(2)を採用する理論の予測通りであると言える。

3.2. 法助動詞のスコープと句構造

3.2.1. 法助動詞のスコープと主語・目的語の非対称性

日本語におけるムード・アスペクト等を表す助動詞と限量表現を伴う名詞句のスコープについては、限量表現のタイプ、それが現われる構造、使用される文脈等の様々な要因に応じて多様な解釈の可能性を示すことが知られている (McGloin (1976), Takubo (1985)などを参照されたい)。一方で、限量表現と法助動詞のタイプを特定して文脈等の要因を排除すると、名詞句が現われる構造上の位置に応じてスコープ関係が決定されることも明らかにされている (Tada (1992),

Koizumi (1995))¹⁷. 例文(22)を参照されたい.

(22) タカシは ケーキだけを 食べられる.

can > only (ケーキを食べることもできる)

?only > can (食べられるのはケーキだけである)¹⁸

(22)においては、限量表現「だけ」を伴う目的語名詞句が、法助動詞「れる／られる」より狭いスコープをとる解釈、すなわち「タカシは、他のものも食べられるが、ケーキを食べることもできる」のような解釈が可能である。このような解釈が存在することは、(23a,b)のように、限量表現が法助動詞より広いスコープをとると不自然な文脈を与えることによって、確認することができる。

(23) a. バイキング形式なので、好きなものだけを食べることができる

(can > only) .

b. ??バイキング形式なので、食べられるのは好きなものだけだ

(only > can) .

c. バイキング形式なので、好きなものだけを食べられる。

(23c)が示すように、(22)の文はこのような文脈で無理なく使用できる。この事実は、限量表現が法助動詞より狭いスコープをとる解釈が存在することを示している。

一方(24)においては、主語名詞句に付加された限量表現「だけ」が、法助動詞「れる／られる」より狭いスコープをとる解釈、すなわち「他の人もケーキを食べられるが、タカシだけが食べることもできる」のような解釈は成立しない。

(24) タカシだけが ケーキを 食べられる.

*can > only (*ケーキをタカシだけが食べることもできる)

only > can (ケーキを食べることができるのはタカシだけ)

これについても、(25)のように文脈を特定して確認することができる。

(25) a. 空席がたくさんあったので、4人がけのシートに私達だけが座る

こともできた (can > only) .

b. ??空席がたくさんあったので、4人がけのシートに座ることができた

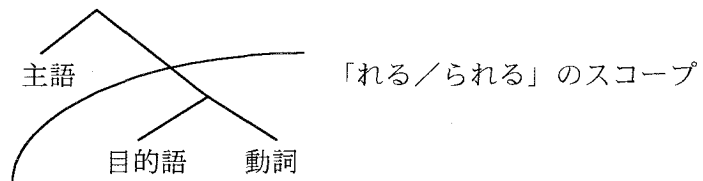
のは私達だけだった (only > can) .

c. ??空席がたくさんあったので、私達だけが4人がけのシートに座れた。

(25c)が不自然であるという事実は、(24)の例文には(25b)と同じく、限量表現が法助動詞より狭いスコープをとる解釈しか存在しないことを示している。結論として、目的語名詞句は法助動詞「れる／られる」より狭いスコープをとり得るが、主語名詞句は必ず広いスコープをとらなければならないことがわかる。

日本語の句構造における主語・目的語の位置については、Saito (1985), Hoji (1985)等に始まる一連の研究において、日本語においても主語・目的語間に構造上の非対称性が存在すること、すなわち主語名詞句が目的語名詞句を非対称的にC統御していることが、明らかにされている。ならば、主語名詞句と目的語名詞句の間に見られる上記の相違も、両者の階層的関係の相違に起因するとみなすことができるだろう。Hoji (1985: 66)においては、Kuroda (1970)において指摘された限量詞解釈に見られる主語目的語間の非対称性を捉えるために、「S構造において、基底生成された位置にある限量詞句が他の限量詞句をC統御するならば、前者が後者より広いスコープをとる」という一般化が提案されている。(22)及び(24)の例においても、法助動詞に対して主語名詞句は広いスコープをとるが、目的語名詞句は狭いスコープをとるので、ある意味でHojiの一般化が成立していると言える¹⁹。そこで「れる／られる」のスコープと主語及び目的語との位置関係を、概略(26)のように表すことができる。

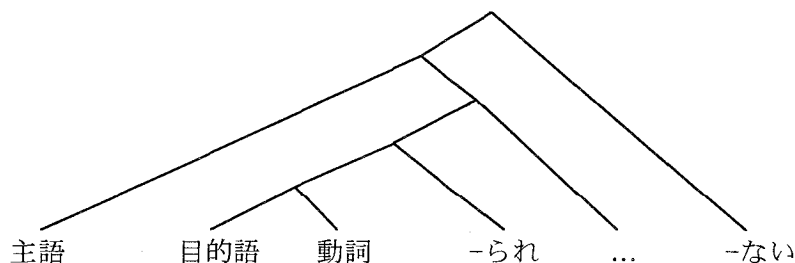
(26)



すなわち、主語目的語間のスコープ特性の非対称性は、C統御している名詞句がC統御されている名詞句より広いスコープを持つというHojiの一般化に沿った形で捉えられ、法助動詞「れる／られる」のとり得るスコープの上限が主語と目的語の中間にあると考えれば、(22)-(25)の観察をすべて説明できる。ただし、法助動詞のスコープがどのような原理に基づいて決定されるかという問題については、他のタイプの法助動詞も考慮に入れた上で、次節において検討することにしたい²⁰。

否定辞のスコープはそれがC統御する領域に基づいて決定されると主張しているので、このTakuboの主張を「れる／られる」を含む他の法助動詞にも拡張してみよう。すなわち、法助動詞のスコープも限量表現を伴った名詞句のスコープと同様に原則として階層的句構造におけるC統御関係に応じて決定されると考える。このように考えれば、「れる／られる」を含む述語が「ない」の補部であるとする、「ない」は必然的に階層的句構造において「れる／られる」より上位の位置を占めるから、より広いスコープ（主語名詞句を含み得る）で解釈されるという説明が成立する。前節において議論した通り、「れる／られる」は主語名詞句より広いスコープをとることができないが、「ない」は主語名詞句より広いスコープをとることが可能である。そこでこれら2種類の法助動詞と主語及び目的語が(29)のような階層的関係にあるとすれば、スコープ解釈に関するこれまでに指摘した事実を総合的に説明することができる²⁴。

(29)



この説明の最大の利点は、助動詞の相互承接に関する特性とその意味解釈に関する特性を、統一的に説明できるという点である。一見無関係な複数の現象のあいだに密接な相関関係がある場合、両者を統一的に捉えることを可能にする説明は非常に好ましいと言える。加えて、このような文の階層的構造と論理的意味の対応は、伝統的な日本語文法研究におけるいわゆる「入れ子型構造（時枝(1941)、北原(1981)に代表される）」のモデルにおいて、日本語各種構文の詳細な分析に基づいて主張され続けてきたことでもある。

3.2.3. 法助動詞のスコープと動詞移動

前節までの議論によって、法助動詞のスコープとその構造上の位置との相関関係が明らかにされた。このような相関関係の存在は、日本語に統語的動詞移動が存在しないことを強く示唆する。次のような、法助動詞が時制辞と結合する例を参照されたい。

- (30) a. タカシだけが ケーキを 食べられた。
 only>can (食べられたのはタカシだけ)
 *can>only (タカシだけで食べることもできた)
- b. タカシだけが ケーキを 食べなかった。
 only>not (食べなかったのはタカシだけ)
 not>only (タカシだけが食べることはなかった)

(30)においても、それぞれの法助動詞は異なるスコープ特性を示す。すなわち、「れる／られる」は主語名詞句より広いスコープを取ることができないが、「ない」は広いスコープを取ることができる。ここでもし仮に、日本語において統語的動詞移動が存在し、法助動詞が移動によって時制辞と結合すると考えてみよう。この場合、いずれの法助動詞にも後続する時制辞「た」は、構造上どの法助動詞よりも高い位置にあると考えられるので、移動の結果いずれの法助動詞も、LFにおいて時制辞の位置まで上昇することになる。故に、スコープ特性が句構造における階層的な位置関係によって決まるとするならば、いずれの法助動詞も同じスコープ特性を示すはずである。しかしこれは、明らかに事実と反する誤った予測である。

一方、統語的動詞移動を仮定しないならば、それぞれの法助動詞は句構造に導入された位置で解釈されることになり、スコープ特性と接続順序の相関関係は正しく予測される。助動詞「ない」と「れる／られる」は、前節で仮定した通り異なる位置にあるはずであり、スコープ特性の相違は簡単に説明できる。

これまでの議論から、法助動詞の解釈上の非対称性と構造上の非対称性を統一的に説明するためには、統語的動詞移動が存在しないと考えるを得ないことが解った²⁵。助動詞と時制辞の結合は、先に議論した通り、音韻部門における形態融合の結果であると考えられる。前節で示したように、日本語における動詞・助動詞と時制辞の結合や複合述語の形成は、統語操作に課せられる制約の面からも、主要部移動よりむしろ形態融合としての特性を示す。これらの事実を総合的に考慮するならば、日本語には統語的動詞移動が存在しないと結論できる。

4. 結語と残された問題点

本論文においては、古典的類型論における洞察を比較統語論、特にChomsky (1995)におけるformal featuresに関する理論の中に取り入れることを試み、その結果として、形態論における屈折性／膠着性と統語的移動の有無の間に相関関係が

存在するという予測を得た。この予測が成立することは、日本語動詞形態の分析とその英語・フランス語との比較を通して確認されたが、今後より広範囲な言語事実の詳細な分析に基づいて、さらに検証することが必要であろう。また、日本語には統語的動詞移動が存在しないとする本論文の主張が事実であるなら、先行研究において統語的動詞移動を仮定することで説明されてきた諸現象を、動詞移動の仮定に頼らずに分析することも残された課題である。

また問題の予測は、動詞移動だけにその対称を限定するものではない。Hale (1983)の階層性(configurationality)パラミターについての研究やBaker (1996)の複総合性(polysynthesis)パラミターについての研究、及び日英語比較統語論におけるFukui (1986), Kuroda (1989)等の研究においては、膠着的動詞形態を特徴的に示す言語が、wh移動やNP移動等の統語的移動現象を欠く傾向にあることが指摘されている。このような先行研究の指摘を踏まえて、動詞移動以外の統語的移動の有無と膠着的形態の関係についても、予測が妥当であるどうかを検討する必要がある²⁶。最後に、言語習得の観点から素性実現に関するパラミターの持つ意義を考察することも重要であろう²⁷。

古典的類型論における優れた洞察は、現代の形式的言語理論（比較統語論）に組み込まれることによって、新たな興味深い相関関係の存在を予測した。理論的装置に組み込まれ、明示的予測を得たことで、言語事実の広範かつ詳細な分析に基づいて、その妥当性を問うことが可能になったと言える。過去の言語研究における優れた洞察と、現代の高度に形式化された言語理論の接点を求めることで、言語の多様性と普遍性の問題の解明に向けて、新たな可能性が開かれれば幸いである。

* この論文は、UC Irvine Linguistics Colloquium, Eighth Japanese/ Korean Linguistics Conference at Cornell University, 日本言語学会第116回大会（於慶應大学）で行った口頭発表の一部に、新たな考察を加えて書き上げたものである。上記の学会において貴重なご意見をいただいた方々に感謝したい。また、Lisa Cheng, Naoki Fukui, James Huang, Kyle Johnson, 青柳宏, 阿部潤, 石井透, 岸本秀樹, 北原久嗣, 齊藤衛, 高野祐二, 竹沢幸一, 藤田耕司, 宮本陽一, 渡辺明の各氏にいただいたさまざまなアドヴァイスやコメントに対して、この場を借りてお礼申し上げたい。ただし、この論文に残された不備や誤りの責任はすべて筆者に帰するものである。

¹ 普遍文法とそのパラミターに関する研究は決して統語論の分野に限られるわけではないため、「比較文法」という表現が用いられることもあるが、この表現は言語の通時的比較研究の意味で使用されることが一般的である。幸い本論文の対象とする領域は、広義の統語論（形態論・統語論）に限られているため、ここでは比較統語論もしくはパラミター統語論という呼称を用いることにする。ただし比較文法(*vergleichende Grammatik*)の語を初めて使用したのは前記 F. von Schlegel であり、彼が「諸言語の内的構造と文法の比較」を試みたことを考慮するならば、現代における言語構造の類型論的研究に再び「比較文法」の名を冠することにも一理あるかも知れない。

² このような方向性の追及は、すでに Sapir (1921)において試みられている。Sapir は、屈折的／膠着的手法の対立を個別言語のさまざまな側面において別個に捉え、その全体を総合的に考慮することで、言語全体の類型化を試みた。しかし Sapir の理論においては、屈折的／膠着的手法の組み合わせには何ら制限が課されていなかったため、論理的に可能な言語のタイプはほとんど無制限であったと言える。Sapir はすでに、「理論上なんのつながりももたない言語的特徴が、それにもかかわらず、集まりあう傾向」の存在を指摘し、「いつの日かそれらから、言語の根底に横たわる基本的構図を読み取ることができるだろう」と述べている。言語の多様性を十分に把握した上で、そのなかの普遍性を抽出しようとする現代の類型論／比較統語論の研究は、このような Sapir の課題 (Baker (1996)を参照されたい) に答えようとする試みであるとも言える。

³ 経済性の原理はミニマリスト理論において中心的役割を果たす重要な部分であるが、その詳細については現在も議論が続いているため、体系的包括的な説明は本論文の範囲を越える。ここでは最小限の記述にとどめ、必要があればその都度説明することにしたい。興味ある読者は、Chomsky の一連の著作 (Chomsky (1991, 1993, 1995)) 及び、Kitahara (1997), Lasnik (1995, 2000b)等を参照されたい。

⁴ Chomsky (1995)はさらに、強い素性(*strong features*)と弱い素性(*weak features*)を区別し、前者は顕在的移動を引き起こすが、後者は非顕在的移動しか引き起こさないと仮定している。強い素性とはどのようなものか、なぜ強い素性だけが顕在的移動を引き起こすのか、等の問題については、Chomsky 自身による複数の提案 (Chomsky (1993, 1995)) を含めて様々な議論が展開されているが、未だに定説はない (Lasnik (2000b)を参照されたい)。FF の理論に関しては、この他にも解明すべき課題が数多く残されており、現在最も研究者の関心を集めている分野である。

⁵ 「 α の素性」の概念は、Chomsky (1993)における L-features (T や Agr のような機能範疇に付与され、V などの語彙的範疇の形態的特性を check する機能を持つ素性)、もしくは、F. von Schlegel の言う「単語の2次的意味」に相当する素性として、インフォーマルに把握しておきたい。具体的には、動詞に対する時制[*past*]等や名詞に対する格[*accusative*]等を想定している。

⁶ Halle and Marantz (1993)においては、*merger* (複数の形態素をそれぞれ独立の節点を保持した形で結び付ける操作)は *fusion* (複数の形態素を単一の節点のもとに結び付ける操作)とさらに区別されている。本論文においては、両者の相違は議論に関係しないので、特に問題としない。また形態融合を引き起こす要因を特定し、移動／照合理論と同様の形式化を目指すことは将来の課題としたい。

⁷ 本論文において仮に[*finite*]と名付けた解釈不可能な固有素性が、定形節 *Infl* に普遍的に存在するか否かという点は、いまだ結論の出していない興味深い問題である。日本語においても、定形節と

非定形節のあいだに明確な統語的特性の相違が存在するならば、固有素性[finite]を仮定する根拠になるであろう。例えば Takezawa(1987)は、日本語においても主語名詞句に対する格付与の特性が、定形節と非定形節で異なると述べている。

8 後述するように、Lasnik (1995)は英語動詞形態の分析において、「Infl には接辞として現われる場合と素性として現われる場合があり、素性として現われた Infl のみが移動を引き起こす」と仮定している。また Fukui and Takano(1998)は、移動を引き起こす機能的な主要部と引き起こさない機能的な主要部についての一般化として、「形態的に空の機能的な主要部のみが移動を引き起こす」との指摘を行っている。しかし、問題の一般化がどのようにしてUGの諸原理とパラメーターから導かれるかについては、これらの研究においては検討されていない。

9 このような日本語における音声形式と論理形式の不一致を金水 (1998) は、「形態と論理のミスマッチ」と呼んでいる。金水によれば、橋本進吉によって展開された「文節」を基本とする文構造の分析と、時枝誠記に代表される文の論理的構成を重視した「入れ子型」分析の相違は、このミスマッチの反映に他ならない。その両者を結び付けることが生成文法理論における統語的派生の役割であるとの興味深い見解が、すでに奥津(1976: 385)において指摘されている。

10 一方動詞移動を仮定する分析としては、Otani and Whitman (1991), Koizumi (1995)等を指摘することができる。Otani and Whitman は、日本語における動詞句削除と考えられる構造について議論しているが、Hoji (1998)による強力な反論がある。Koizumi は、等位接続に関する興味深い事実を論拠として動詞移動の存在を主張しているが、Takano (1996)において指摘されているように、「等位接続」とみなされている構造が、英語等の言語における等位接続構造と同じ性質のものであるかについてはまだ議論の余地がある。本論文においては、これらの研究に直接反論を試みるよりむしろ、日本語には動詞移動が存在しないとの主張に対して確実な証拠を提出することに専念したい。上記の研究において指摘された事実が、動詞移動を仮定することなしにどのように説明できるかについては、今後の課題として残される。

11 Chomsky (1995)において主張されているように、Numeration を形成する際の語彙項目の選択が統語部門と語彙目録との唯一の接点であるならば、いわゆる補充形(suppletion)の扱いが本論文で提案された分析の問題となるかも知れない。Nにおいて動詞が時制と組み合わせられていなければ、語彙目録から補充形を導入することができなくなるからである。しかしこの問題は、Halle and Marantz (1993)に代表される Distributed Morphology と呼ばれる理論を採用し、音韻情報の一部は音韻部門においても挿入可能であると仮定することで回避できる。

12 Lasnik 等の分析におけるもう一つの重要な問題は、否定辞の介在は形態融合を阻止するが、次の(i)のように副詞類が介在しても、形態融合は阻止されないという事実である。

(i) She -ed often walk around here. ---> She often walked around here.

Lasnik (1995), Bobaljik (1995)等は、形態融合の条件である隣接性の定義から、副詞を含む付加詞を除外することを示唆している。しかしながら、次節において議論するように、日本語における「も／だけ／さえ」などの小辞は、付加詞であるにもかかわらず形態融合をブロックする。そこでより正確な一般化としては、付加詞のなかでも、否定辞及び小辞のように位置が固定された要素は形態融合を阻止するが、副詞のように比較的自由的な位置を取りえる要素は阻止しない、ということになる。

もしこの一般化が正しいとすると、なぜ副詞類が形態融合を阻止しないのかという問題は、語順の自由さと関係づけることができるかもしれない。すなわち副詞類の位置が、音声形式の出力に近い時点で文体的要因にもとづいて決定され、形態融合が起こる時点ではまだ固定されていないとすれば、副詞類は実は Infl と動詞の隣接性を妨げていない可能性がある。このような可能性を追求するためにも、音韻部門における派生についての研究の進展に期待したい。

13 これらの小辞の統語的特性については、Kuroda 以降にも Sells (1995), Aoyagi (1998)等多数の研究がある。なかでも Aoyagi (1998)は本論文と同様に、小辞は付加詞的接語(adjunct clitic)であるとの主張を展開している。

- 14 Sells (1995)においては、補助動詞による補文形式の選択をめぐる、同様の趣旨の議論が展開されている。Sellsはこのような事実を論拠として日本語動詞形態の統語的派生を否定し、純粋に語彙論的な分析を提唱するに至るが、本論文においては、補部の選択をめぐる諸事実は「も／だけ／さえ」が付加詞であることを示すに過ぎないと考える。前述の通り Aoyagi (1998)も、本論文と同様の結論に至っている。また Nishiyama(1998b)は、Sells の分析を詳細に検討し、強力な反論を展開している。
- 15 日本語における dummy verb 挿入をめぐる諸問題と、そのメカニズムの詳細については、Aoyagi (1998), Miyagawa (1998), Nishiyama and Cho (1998), Nishiyama (1998a)において議論されている。
- 16 (19)において格助詞「が」が削除されると、表面的には文法的な文「タカシも／だけ／さえ走った」と同形になるため、(19)が実は文法的なものではないかと誤解されるかもしれない。しかし文「タカシも／だけ／さえ走った」においては、主語名詞句をフォーカスとする解釈しか許されないが、小辞が動詞句に付加されている文「タカシが走りも／だけ／さえした」においては、動詞句をフォーカスとする解釈が可能である。もし上記の文が(19)の構造を持つなら、動詞句をフォーカスとする解釈も許されるはずである。故に構造(19)は、文法的な文「タカシも／だけ／さえ走った」の構造ではあり得ず、あくまでも非文法的であると考られる。
- 17 Tada (1992)は、状態述語を含む構文における主格目的語も主語名詞句と同様に法助動詞より広いスコープをとることを指摘し、このような観察を論拠として、日本語状態述語文における主格付与についての分析を提案している。目的語名詞句とムード・アスペクトを表す助動詞との間のスコープ関係については、Koizumi (1995)が詳細な議論を展開している。
- 18 Koizumi (1995)が注記しているように、目的語名詞句が「れる／られる」より広いスコープをとり得るか否かについては、母語話者の間でも判断が一定しない。しかし本論文の議論にとって重要なのは、「れる／られる」が主語名詞句より狭いスコープをとり得るかという問題だけで、目的語名詞句が広いスコープをとれるか否かは議論には直接関係しない。故にこの可能性については、特に言及せずに議論を続けたい。
- 19 Hoji の一般化は、同一文中における複数の限量詞句のスコープ関係について述べたものであるが、これをほぼミニマル・ペアを形成する複数の文に拡張して解釈すれば、一般化が成立していると言うことができる。
- 20 日本語句構造における主語と目的語の位置については、近年様々な提案がなされている。Fukui (1986)においては、IP 指定部に位置する英語主語とは異なって、日本語主語は動詞句内部に留まると主張されている。同様の指摘は Lasnik and Saito (1992)にも見られる。一方目的語の位置に関しては、Koizumi (1995)において詳細な議論が展開されている。しかしこれらすべての研究に共通して、主語は階層的句構造のなかで目的語より上位に位置すると主張されているので、様々な提案の間の相違は本論文の議論に直接関係しない。
- 21 McGloin (1976)においてすでに指摘されているように、否定辞が限量表現より広いスコープを取る解釈は、文脈を排除された単文においては好まれないことが多く、従属節においてより容易である。また限量詞のタイプに応じて、スコープ特性に相違があることも指摘されている。本論文の議論にとっては、否定辞が限量表現より広いスコープを取り得るという事実のみで十分なため、この問題についてはこれ以上言及しない。
- 22 「ない」に加えて、「そうだ」などのいわゆる推量の助動詞類は、主語名詞句より広いスコープをとることができる。「今度の舞台では3人のテナーの合唱に加えて、何曲かパヴァロッティだけが歌いそうだ」のような例文では、[[パヴァロッティだけが歌い] そうだ]のような解釈が十分可能である。
- 23 (28b)の非文法性は、「ない」が形容詞的な性格を持つ一方で、「れる／られる」が補部とし

て形容詞的述語を選択しないためである、と主張されるかもしれない。しかしこの種の選択制限違反は、一般に dummy verb 「ある」を挿入することで回避することができる（「うつくしいーられる」>「?うつくしくあれる」）。故に(28a,b)の間のコントラストは、助動詞による補部の選択制限の問題ではないと考えられる。

24 すでに説明した通り、推量の助動詞や「ない」は、主語名詞句より広いスコープをとることも可能である。このような解釈の可能性を説明するために、主語名詞句が推量の助動詞や「ない」より高い位置にある構造も可能である（すなわち、[[マユミだけが来]そうだ]のような構造も[マユミだけが[来そうだ]]のような構造も両方可能である）と考えておきたい。前者の構造では主語名詞句は動詞句内部に留まっていると考えられ（Fukui (1986), Lasnik and Saito (1992)）、後者の構造では助動詞もしくは IP の内部に上昇している（Takezawa (1987)）と考えられる。

スコープ解釈のあいまい性を捉えるもう一つの方法は、主語名詞句が推量の助動詞や「ない」より低い位置に導入され、より高い位置に移動すると仮定することである。この場合主語名詞句は、いわゆる再構築効果(reconstruction effect)によって、推量の助動詞や「ない」より狭いスコープをとると考えることができる。しかしA位置への移動が再構築を許すか否かについては議論の分かれるところである（Chomsky (1995), Lasnik (2000b)）。また、もし仮に再構築を認めるとすると、なぜ「れる／られる」に対して主語名詞句が狭いスコープを取れないのかを説明することが難しくなる。構造的あいまい性を仮定する分析を採用すれば、このような問題を避けることができる。

25 3.2節においては法助動詞の移動のみを分析対象としたため、法助動詞が統語的動詞移動を起こさなくても、その他のタイプの助動詞及び動詞においては、動詞移動が存在する可能性もあると指摘されるかもしれない。その可能性は確かにゼロではないが、理論的及び経験的に考えにくい。ミニマリスト理論においては、すべての移動はFFによって動機づけられているため、時制辞のFFが法助動詞の移動を引き起こさないなら、他のタイプの助動詞の移動も引き起こさないと考えられる。またこれまでの研究において、英語のように助動詞の移動が認められつつ動詞の移動を欠く言語の存在は報告されているが、逆の事例は報告されたことがない。以上を総合して、他に積極的に動詞移動を仮定する証拠が指摘されない限り、すべての助動詞及び動詞において動詞移動は存在しないと考えるのが妥当であろう。

26 Chomsky は近年、パラミターは基本的に形態論の範囲に限定されるかもしれないと示唆している（Cheng and Sybesma (1995)）。本論文における議論が正しければ、随意素性の付与に関するパラミター(2)は、まさに Chomsky の示唆するような形態論的パラミターであると言える。このような形態論の範囲に限定されたパラミターから、他の統語的特徴の相違がどこまで導き出されるのかという問いに答えることは、Chomsky の示唆の可能性を迫及する観点から見ても、有意義な試みであると言えるだろう。

27 なかでも興味深い可能性の一つは、もしパラミターが(2)のような形でUGに備え付けられているならば、子供は形態的特徴（膠着性／屈折性）を観察することで、統語的特徴（移動の有無）を予測できるということである。言語習得の観点から、果たしてこのような可能性を支持する証拠が得られるかどうかは、重要な研究課題である。

参考文献

- Anderson, Stephen R. 1985. Typological distinctions in word formation.
In: T. Shopen (ed.) *Language typology and syntactic description*.
Vol. 3: *Grammatical category and the lexicon*. Cambridge:
Cambridge University Press.
- Aoyagi, Hiroshi 1998. Particles as adjunct clitics. *NELS* 28, 17-31.
- Baker, Mark 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing*.
Chicago: University of Chicago Press.
1996. *The polysynthesis parameter*. Oxford: Oxford University Press.
- den Besten, Hans 1983. On the interaction of root transformations and lexical
deletive rules. In: W. Abraham (ed.) *On the formal nature of the*
Westgermania. Amsterdam: John Benjamins.
- Bobaljik, Jonathan D. 1995. *Morphosyntax: The syntax of verbal inflection*.
Doctoral dissertation, MIT.
- Cheng, Lisa L. and Rint Sybesma 1995. Language is the perfect solution!:
Interview with Noam Chomsky. *Glott International* 1 9/10: 1, 31-34.
- Chomsky, Noam 1957. *Syntactic structures*. The Hague: Mouton.
1981. *Lectures on government and binding*. Dordrecht: Foris.
1986. *Knowledge of language: Its nature, origin, and use*.
New York: Praeger.
1988. *Language and problems of knowledge: The Managua lectures*.
Cambridge, Mass.: MIT Press.
1991. Some notes on economy of derivation and representation. In:
R. Freidin (ed.) *Principles and parameters in comparative grammar*.
1993. A minimalist program for linguistic theory. In: K. Hale and S. J.
Keyser (eds.) *The view from the building 20: Essays in linguistics in honor*
of Sylvain Bromberger. Cambridge, Mass.: MIT Press.
1995. *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik 1993. Principles and parameters theory.
In: J. Jacobs, A. van Stechow, W. Sternefeld, and T. Vennemann (eds.)
Syntax: An international handbook of contemporary research. Berlin:
Walter de Gruyter.
- Emonds, Joseph 1978. The verbal complex V-V' in French. *Linguistic Inquiry*
9, 151-175.
- Fukui, Naoki 1986. *A theory of category projection and its applications*.
Doctoral dissertation, MIT.

- (A revised version published as *Theory of projection in syntax*.
Stanford Calif.: CSLI Publications, 1995.)
1988. Deriving the differences between English and Japanese: A case study in parametric syntax. *English Linguistics* 5, 249-270.
1995. The principles-and-parameters approach: A comparative syntax of English and Japanese. In: T. Bynon and M. Shibatani (eds.) *Approaches to language typology*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Fukui, Naoki and Yuji Takano 1998. Symmetry in syntax: Merge and demerge. *Journal of East-Asian Linguistics* 7, 27-86.
- Hale, Ken 1983. Warlpiri and the grammar of non-configurational languages. *Natural Language and Linguistic Theory* 1, 5-47.
- Halle, Morris and Alec Marantz 1993. Distributed morphology and the pieces of inflection. In: K. Hale and S. J. Keyser (eds.) *The view from the building 20: essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hoji, Hajime 1985. *Logical form constraints and configurational structures in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.
1998. Null object and sloppy identity in Japanese. *Linguistic Inquiry* 29, 127-152.
- Hoshi, Hiroto 1994. Theta-Role assignment, passivization, and excorporation. *Journal of East-Asian Linguistics* 3, 147-178.
- Kitagawa, Yoshihisa 1986. *Subjects in Japanese and English*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Kitahara, Hisatsugu 1997. *Elementary operations and optimal derivations*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Koizumi, Masatoshi 1995. *Phrase structure in minimalist syntax*. Doctoral dissertation, MIT.
- Kuroda, S-Y. 1965. *Generative grammatical studies in Japanese*. Doctoral dissertation, MIT. (Reprinted by New York: Garland Press, 1979.)
1970. Remarks on the notion of subject with reference to words like *also*, *even*, and *only*. *Annual Bulletin, Research Institute of Logopedics and Phoniatrics*, 3/4.
1989. Whether we agree or not. *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.
1992. *Japanese syntax and semantics: Collected papers*. Dordrecht: Kluwer.
- Lasnik, Howard 1995. Verbal morphology: Syntactic structures meets the minimalist program. In: H. Campos and P. Kempchinsky (eds.)

- Evolution and revolution in linguistic theory: Essays in honor of Carlos Otero.* Washington D.C.: Georgetown University Press.
- 2000a. *Syntactic structures revisited: Contemporary lectures on classical transformational theory.* Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 2000b. *Minimalist analysis.* Oxford: Blackwell.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito 1992. *Move α : Conditions on its application and output.* Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Marantz, Alec 1988. Clitics, morphological merger, and the mapping to phonological structure. In: M. Hammond and M. Noonan (eds.) *Theoretical morphology.* San Diego: Academic Press.
1989. Clitics and phrase structure. In: M. Baltin and A. Kroch (eds.) *Alternative conceptions of phrase structure.* Chicago: The University of Chicago Press.
- McGloin, Naomi 1976. Negation. In: M. Shibatani (ed.) *Syntax and semantics 5: Japanese generative grammar.* New York: Academic Press.
- Miyagawa, Keiko 1998. The Japanese dummy verbs and the organization of grammar. *Japanese/Korean Linguistics 7*, 427-443. Stanford, Calif.: CSLI Publications.
- Nishiyama, Kunio 1998a. A unified analysis of Japanese adjectives. *Japanese/Korean Linguistics 8*, 175-188. Stanford, Calif.: CSLI Publications.
- 1998b. *The morphosyntax and morphophonology of Japanese Predicates.* Doctoral dissertation, Cornell University.
- Nishiyama, Kunio and Eun Cho 1998. Predicate cleft constructions in Japanese and Korean: The role of dummy verbs in TP/VP-preposing. *Japanese/Korean Linguistics 7*, 463-479. Stanford, Calif.: CSLI Publications.
- Otani, Kazuyo and John Whitman 1991. V-raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry 22*, 345-358.
- Platzack, Christer 1986. COMP, INFL and Germanic word order. In: L. Hellan and K. K. Christensen (eds.) *Topics in Scandinavian syntax.* Dordrecht: Reidel.
- Pollock, Jean-Yves 1989. Verb movement, universal grammar, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry 20*, 365-424.
- Roberts, Ian 1998. Have/Be raising, move F, and procrastinate. *Linguistic Inquiry 29*, 113-125.
- Sakai, Hiromu 1998. Feature checking and morphological merger. *Japanese/Korean Linguistics 8*: 189-201. Stanford, Calif.: CSLI Publications.

- Sapir, Edward 1921. *Language: An introduction to the study of speech*.
New York: Harcourt, Brace & Co.
- Schlegel, Friedrich von 1808. *Über die Sprache und Weisheit der Indier: Ein Beitrag zur Begründung der Alterthumskunde*. Heidelberg: Mohr und Zimmer. (In: W. Lehmann (ed.) *A Reader in nineteenth-century historical Indo-European linguistics*. Bloomington: Indiana University Press, 1967.)
- Sells, Peter 1995. Korean and Japanese morphology from a lexical perspective. *Linguistic Inquiry* 26, 277-325.
- Tada, Hiroaki 1992. Nominative objects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14, 91-107.
- Takano, Yuji 1996. *Movement and parametric variation in syntax*. Doctoral dissertation, University of California, Irvine.
- Takezawa, Koichi 1987. *A configurational approach to Case-marking in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.
- Takubo, Yukinori 1985. On the scope of negation and question in Japanese. *Papers in Japanese Linguistics*, 10, 87-115.
- Yoon, James Hye Suk 1994. Korean verbal inflection and checking theory. In: *MIT working papers in linguistics 22: The morphology-syntax connection*. Department of Linguistics and Philosophy, MIT.

- 奥津敬一郎 (1976) 「生成文法と国語学」 『岩波講座日本語第6巻：文法Ⅰ』 岩波書店
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語』 大修館書店
- 北原保雄 (1981) 『日本語助動詞の研究』 大修館書店
- 金水敏 (1998) 「国文法」 『岩波講座言語の科学第5巻：文法』 岩波書店
- 澤田治美 (1993) 『視点と主観性-日英語助動詞の分析-』 ひつじ書房
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析-生成文法の方法-』 大修館書店
- (1989) 「言語類型論」 『英語学大系第6巻：英語学の関連分野』 大修館書店
- 時枝誠記 (1941) 『国語学原論』 岩波書店
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』 塙書店

(さかい ひろむ, 広島大学)

Classical Typology and Comparative Syntax:

From the Analysis of Japanese Verbal Morphology

Hiromu SAKAI

Abstract

F. von Schlegel (1808) has observed that languages indicate the secondary markings of meaning (i.e. tense, number, case, etc.) either by inner change of root or by adding a separate morpheme. He thus argues that these two simple cases designate the two main types of all languages, i.e. inflectional languages and agglutinative languages. Despite of later criticisms, this idea of classical (morphological) typology remains to be one of the most famous ways of classifying language types. Twentieth century generative linguists (Chomsky (1988), among others) assume that invariant principles of Universal Grammar narrowly restrict the class of possible grammars. Since languages still differ one from another in syntactic structure, they argue that UG principles are equipped with parameters which can be fixed by experience. Language variation is thus attributed to difference in setting of values of parameters. The theory of language variation guided by the idea of UG and its parameters is called "parametric syntax" or "comparative syntax". In this paper, we propose a theory of parameters that incorporates the classical typologists' insight into the current framework of generative syntax. To be more specific, we incorporate the idea of classical typology into the system of "formal features" proposed by Chomsky (1995). The proposed theory predicts that existence of agglutinative morphology is directly related to the lack of obligatory syntactic movement. That is, agglutinative languages employ the operation Morphological Merger (Marantz (1988, 1989), Halle and Marantz (1993)) in the phonological component instead of the operation Move in the syntactic component. We show that this prediction is born out through the contrastive analysis of verbal morphology in Japanese.